

昭和58年度  
(1983)  
第23回大会

男子優勝 札幌藻岩 女子優勝 札幌藻岩

【 専門委員長 寸評 】

本年度は新たに名寄支部が参加し、10支部で争うことになった。北見支部にも部・同好会の設立が見られたので参加すれば、これで全11支部がそろふことになる。年々各地域とも充実してくるのが楽しみである。

そのせいか、今年は地方勢の活躍が目立った。男子団体では、滝川がよくがんばり清田を倒して決勝進出を果たし、釧路、函館も善戦した。決勝は気後れがあつたか藻岩の一方的勝利となったが今後が期待される。

女子は、例年通り清田と藻岩の札幌勢の争いとなったが、藻岩S1の沼田よく健闘し、勝負をS2につないだ。玉堀-佐々木は一進一退、タイブレークとなり、ポイントの勝負となったが、佐々木よく粘り、清田の4連勝を阻んだ。藻岩の闘志をたたえると共に、佐藤の不調が惜しまれた一戦であった。

また、旭川東の準決勝進出が光った。全員2年生だけに、来年を期待したい。

個人戦男子は、単・複とも藻岩が強かった。他に神下(室工)、池田(滝川)の大きな成長が現れた。

女子は、シングルスは杉野(札東)が勝利をにぎる。佐藤(清田)は団体、個人とも精彩がなかったが、まだ2年生だけに今後が楽しみ。ダブルスは北川・鈴木(札清田)が安定していた。沢井・伊藤(旭川東)、桜井・岡本(手稲)の2年生勢に今後の伸びを期待したいところである。

今年度は参加支部が増え、運営、進行が心配されたが、当番校、札幌東の万全のコート整備、運営準備のお陰でスムーズに進行したことを報告し、当番校の諸先生のご苦勞に感謝申し上げる次第である。

【全国大会】

残念ながら本年度は完敗であった。男子団体の廿日市に対しては力の差は感じられないが、藻岩にやや力みがあった。川端・山田の若きペアはともかく西股の乱れが痛かった。攻めをさせる気持ちがポイントのところに出てきたのであるが、もう少し安定性がほしか

った。

女子は大きな大会への経験不足。自分の力が出せないままに終わってしまった。

個人戦では、徳丸・西股のダブルスの3回戦進出が唯一の救い、団体戦決勝進出のNo.1、No.2ペアに対し、1セットは波に乗れず、2セット目で調子が出てきたが遅かった。山田は第1シードの山室に4ゲームまではよく闘ったが以後力つきる。

女子は、杉野がよく2回戦進出を果たしたが、ベスト8に入った小寺を押し切ることができなかった。

今後の課題は、藻岩、清田の限られた学校に頼ることなく、北海道全体の層を厚くし、多くのものに全国的なレベルの大会の経験を与え、ハイレベルの中で切磋琢磨をはかることであろう。

( 専門委員長 亀山 省吾 )

## 優勝のよろこび

男子 札幌藻岩高等学校

「やった！」滝川高校のNo.2の打球がネットした瞬間、札幌藻岩高校男子庭球部のV7が決まりました。

最上級生になった時から、「連勝記録は、絶対にストップさせない」これ目標の一つにして練習に取り組んできただけに、その喜びは言葉では言い表すことができないほどでした。そんな喜びの反面、ほっとした気持ちがあったのも事実です。

思い起こせば1年生の頃、まだ勝つことの大変さをよくわかっていませんでした。しかし、2年生、3年生になるにつれて、自分達がやらなければという自覚が出てきました。特に3年生にとっては最後の年で、3年間毎日積み上げてきた練習の成果を出し切る最後のチャンスです。それだけみんな気合いが入り、応援、選手一体となった試合時のムードは最高でした。

今年に限ってはそれほどの苦戦もなく、スムーズに決勝まで勝ち上がって行くことができました。

さあ、決勝戦、いくらスムーズに来たとはいえ、この試合では何が起こるかわかりません。そんな緊張の中で始まった決勝戦も、シングルス、ダブルスの3ポイントすべてを取り優勝することができました。

あの時の「やった！ついにやったんだ！」という実感は、3年生はもちろんのこと、2年生、1年生のこれからにおいても、とても貴重な経験だと思います。

このような貴重な経験を私達に与えてくれるまでご指導いただいた先生、関係者のみなさまにお礼を申し上げ、またこの貴重な経験を後輩へ、そのまた後輩へとつないでいってほしいと願っています。

( 札幌藻岩高等学校 主将 徳丸博之 )

# 優勝のよろこび

女子 札幌藻岩高等学校

全道大会優勝、全国大会出場。これは私達の目標でもあり、夢でもありました。5年前に優勝して以来ずっとこの夢を果たすことができないでいたのです。どうしても宿敵清田を破ることができず、2位の座にとどまっていました。そして私たちには、「優勝はしないにしても、2位の座は絶対に、どこにも譲れない」という意地がありました。先輩方からそうだったので、ここで成績を落とすことはどうしてもできないというかなりのプレッシャーがありました。

地区大会準優勝・・・私たちは東高校に簡単に敗れてしまいました。3年生にとってはこれが最後の大会、それなのに目標の全国どころか、全道へも行けないなんて・・・全国の夢も伝統もすべてくずれてしまいました。今まで何のためにテニスをしてきたのか・・・ただ呆然とするばかりでした。ところが幸いにも、東高校が当番校ということで、3校全道へ出場できることになったのです。本当にラッキーでした。このようにして私達は、おまけのように全道へくっついて行ったのです。それが清田を倒し、優勝するなんて、だれも思っただけではなかったでしょう。

全道大会の決勝の試合は、とても緊迫したものでした。特にシングルスは、タイブレークで、1球1球打っているというよりはむしろ当てているという感じでした。それだけ1本1本慎重に返していたのです。この時ほど1球の重みを感じたことはありません。前に先輩が話していた「1本1本つなげて、ねばっこく、気持ちの悪い試合をなさい。」という言葉が思い出されます。“気持ちの悪い試合”とはまさにこの時の試合を言うんだと思えるほどのものでした。あの優勝の場面は、今でも目に焼き付いて離れません。

今回私たちが優勝できたのは、地区で3位に落ちたことをいい刺激にして、少ない練習時間の中でいかにその日の練習を自分のものにするか・・・その中から出てきた集中力、1・2年生の影の力があらわれたのではないかと思います。それから個人戦で沼田が3位に入り、すでに全国大会出場が決まっていました。沼田を1人で全国へ行かせたくないという気持ちが強く働いていたことも欠くことができません。このことがなければ、いつものように、やっぱり清田に負けていたのかも知れません。清田に比べると、練習量も練習内容も劣っていると思われる私たちが勝てたのです。この喜びは、とても言葉では言い表すことができません。

ここまでこられたのは先生方のおかげでもありますし、また私たちの力でもあると自信を持っています。今までのつらかったことも、これですべて無駄にならずにすみました。

“終わりよければ総てよし” まったくその言葉どおりです。

しごかれて、やらされて得たものではなく、自分たちで造り上げて得たものです。私たちは、このことに、本当に誇りを持っています。

( 札幌藻岩高等学校 主将 斎藤雅代 )

全国高校総体（第73回全国高等学校庭球選手権大会） 静岡

8月2日～8日 静岡県立草薙総合運動場庭球場  
静岡市駿府公園庭球場

男子 個人戦シングルス 優勝 土橋登志久（柳川）